

大手 裕子 氏(大阪成蹊大学芸術学部 教授)

私のこれまでの経験では、作者の皆さんが制作される現場に立ち会い作者の意志、画材や素材への向かわれ方に直に触れることと一緒に作品を受け止めることがほとんどでした。このことから作品のみに向かい感じとること、ましてや評価することは本当に難しいことです。

私が特に魅かれる点は、上記のような現場から作者ご本人の思いの先に独自の技法スキルが生み出されることがあるということです。今回は1つそのような視点(現場を想像して)を持って皆さんの作品を見せていただき新しい発見も得られました。ここに無限の可能性がある!という確信が改めて持てました。

岡 泰正 氏(神戸市立小磯記念美術館・神戸ゆかりの美術館 館長)

いつも思うのですが、審査する側が、試されているような気持になります。出品作の発する声を聞きもらしていないか何周も作品を見てまわります。各作品の熱量を感じてはげまされるような気持になります。今回も真剣勝負で選びました。

「糸で紡ぐ日本一周」は既成概念にとらわれず造りたいものを造るという意志のなかで、小さなクッションに刺繍を施してイメージの列島図を造形しています。赤い糸が血管のように見えます。「遊びに行こう」は、書の部門の入賞ですが、万博のイメージをもりこみ、2色の立体的な筆づかいが見事でした。「SCREAM(叫び)」は、大きな画面にチャレンジした意欲作で不定形のごめきに手が伸びていて、空間に湧き上がる生命体のようで、タブローとしての完成度を示しています。「無題」は、増殖する顔が、透明な支持体を埋め尽くしていて、出口の見えない未来を見るようで切迫感に圧倒されます。

岸本 吉弘 氏(神戸大学国際人間科学部 教授)

今年も密度の高い作品に多く出会えることができ感銘を受けました。なかでも絵画作品は全体的にも質が高く、印象的でした。ユニークな色彩感覚や緻密な画面構成、それらが理屈を超えた独特な作品の存在感につながっているのが大変に魅力的でした。作品は何より描き続けること造り続けることが大事です。そうした中で、どんどん作品が変化していく方もいるでしょう。恐れずに、こだわり、描き、造り続けてください。

服部 正 氏(甲南大学文学部人間科学科 教授)

今年も多くの方が力のこもった作品を出品してくださり、ありがとうございました。作品を作るという行為は、自分の内にある何かを外に出すということだと思えます。何か描きたいものがはっきりと自分の中にある、それを自分らしいやり方で表現した作品はとても魅力的です。しかし、まだ自分自身でもはっきりとは分からないもの、言葉や形にはならないもやもやとした思いが、そのまま表出されているような作品にも強い力があります。上手に描く、きれいに色を塗るということを超えて、やむにやまれぬ強い思いは、たとえ無器用であっても見る人の心を動かします。紙や木などの素材に、ただただ強く思いをぶつけるだけでも、それはその人の表現として人の心に響きます。これからも遠慮することなく、自信をもって自分の思いをぶつけてください。アートはそれが許される場所です。

山崎 均 氏(西脇市岡之山美術館副館長兼主任キュレーター)

とても充実した内容の作品ばかりでした。最も印象的だったことは、言葉にできない何かを大切に制作に向かっていることが伝わってくることと、それぞれの表現の独自性です。日常の何気ない暮らしのなかでの驚きや興味深いことを自らの思いと表現方法によって紡いでいくことの大切さに気づきます。作品に接すると、新鮮な感情が湧き起こります。これらのことをアート本来の魅力として大切にしていきたいと思えます。こうした作品を一堂に接することができる開かれた場とソーシャルなプラットフォームを皆で支えあってつくることの大切さにも気づきます。